

都道府県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事例を含む。)	実施結果(効果、問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
山口県	【若年者確保について】	<p>○はたちの献血キャンペーン(1月～2月) 10地区12会場にてイベント開催</p> <p>○高校卒業記念献血キャンペーン(3月1～31日) 献血ルーム(下関市)において、高校3年生を対象に、卒業を契機とした献血体験の推進を図る。</p> <p>○山口県学生献血推進協議会の育成 1.中国・四国統一キャンペーン(7月) 2.全国学生クリスマスキャンペーン(12月)</p> <p>○中学生・高校生を対象に献血推進ポスター・作文を募集し、若年層に対する献血思想の普及に努める。</p> <p>○献血読本配布による啓発 献血思想を普及し、献血者の拡大を図るため、高校及び高専1年生全員に献血読本「SEISHUN!献血」を作成し配布</p>	<p>○高校生、大学生、専門学校など若者の参加多数あり。</p> <p>○高校生の献血への参加及び啓発活動の推進</p> <p>○中学生、高校生の献血思想の醸成</p> <p>○献血可能年齢(16歳)となる、高校1年生を中心に啓発することで、献血の必要性について一層の理解を深める。</p>	<p>○若年層への啓発及び献血者拡大</p>
徳島県		<p>◎献血メイト20s'推進事業 将来にわたって安全な血液製剤を安定して確保するため、若年層(特に20才代)献血の一層の推進を図る。</p> <p>・献血メイト20s'推進キャンペーンの実施 ・卒業生献血キャンペーンの実施 ・血小板成分献血・400mL献血推進キャンペーンの実施</p>	<p>効果</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・若者への献血思想の啓発が図られた。</li> <li>・副次的な献血者(若年者以外の)確保が図られた。</li> </ul> <p>問題点</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・イベント会場での献血車の配車調整が困難</li> <li>・大学祭等の開催日が重なり効率的な配車が困難</li> <li>・大学におけるサークル活動の一層の支援が必要</li> </ul>	<p>○イベント、採血場所を可能な限り同一場所とし採血者への負担を軽減</p> <p>○学内献血における若年層献血者の一層の確保対策の強化</p> <p>○緊急時対応策の充実</p> <p>○ボランティア活動としての献血意識の向上</p>
香川県		<p>○献血可能年齢に達する高校生を対象に、街頭献血キャンペーンを実施。献血に関する基礎知識を学習した後、街頭に立って献血への協力の呼びかけを行った。</p> <p>◎若年層が多く集まるプロスポーツの試合会場において献血のキャンペーンを行った。</p>	<p>○昨年度から県内2か所の大型スーパーにおいて実施し、より広い地域の高校生に参加してもらえるようになった。しかし、今後、参加者も重複することが予想されることから、幅広い対象者の確保に工夫が必要と考える。</p> <p>○スポーツの試合会場においては、若年層の参加型イベントを実施し、献血に親しんでもらった。</p>	<p>○血液が不足する時期には、特に若年層を意識した広報媒体による全国レベルでの広報(例えばテレビコマーシャルなど)を行うと、機運も盛り上がると考える。</p>

都道府県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事柄を含む。)	実施結果(効果、問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
愛媛県	【若年者確保について】	○小学生親子血液センター見学体験教室の開催  ○学校に対する普及啓発資料の提供及び献血出張教室の実施 ○大学におけるボランティアサークルに対する活動の支援	○「見学体験教室」は8月初旬の3日間開催し、参加者児童70人、保護者42人の合計112人の参加があった。 ○将来の若年層に対しては、血液のはたらきや献血に興味をもってもらった。 ○小学生親子血液センター見学体験教室では、病院での実際の輸血現場も見学してもらい、命の大切さ・尊さについて実感してもらい好評であった。 ○大学生のボランティアサークルに対しては、献血の正しい知識の普及及び若年層の献血意識の向上を図るための活動を支援した。	○若年層献血者数が減少しているため、特に大学生や専門学校生に対しての献血呼びかけを推進し、引き続き若年者確保に取り組む必要がある。
高知県		○ヤング献血スクールとして、高校生を対象に学校での献血体験や呼びかけの体験を実施  ○血液センター見学会(公立中学生) ○各種団体青年部を対象とした献血セミナー ○学生や楽団による献血PR	○3校で延べ4回実施  ○2回実施 ○4回実施。組織的な協力が必要 ○4回実施。若者を引き付けるものが必要	○教育委員会との連携の強化が必要。校長会や養護教員研修等への参入、献血バス予定表の各学校への配布(まず教職員の協力から)
鳥取県	【複数回献血者確保について】	○会員募集の依頼及び献血キャンペーン等の案内	○複数回献血クラブを立上げ、血液不足時にメール等で協力要請を行っている。登録者(260名:18年度)	○固定的な献血者の確保及び緊急時の即時対応が行える体制作りと登録者へのサービス内容
島根県		○成分献血、希少血液献血登録制度の推進及び複数回献血者登録制度の推進	○成分献血 10,922名 希少血液献血 427名 複数回献血者 415名	
岡山県		○複数回献血クラブの周知	○広報リーフレットを作成し、複数回献血クラブの周知を図った。会員数563人(平成18年度末現在)	○複数回献血クラブへの登録者の確保にあたり、さらなる周知が必要 ○メールによる操作が必要なため、登録まで至らないことが多く、今後は、献血実施後の休憩時間等を利用して、現場での登録を推進する必要がある。
広島県		○献血者へ次回の献血を促す資料の作成、配布等 ○献血不適者に対する健康管理のアドバイスなど次回献血を促すサービスの提供	○比重不足により献血できなかった者に対して、健康管理の参考とするためのリーフレット作成及び献血ルームにおいて栄養士による栄養相談実施(2月)	○献血不適者へのフォローアップ及び次回献血の案内等による計画的な年間献血者の確保
山口県		○街頭、地域献血を中心に、過去1年間献血協力者に対しDM及び電話による献血要請 ○複数回献血クラブ会員の更なる募集及び活用 ○県職員・市町職員献血協力者名簿、市内事業所献血協力者名簿の作成	○複数回献血者の更なる確保  ○献血者への情報提供	○緊急時における確実な献血協力が可能
徳島県		○複数回献血クラブ会員の募集及び活用(センター) ○献血メイト20's推進キャンペーンとの連携 ○初回及び5回献血者への記念品(協議会長感謝状) ○健康相談会等の実施(センター)	効果 ・新たな複数回献血者の確保が得られた。 ・緊急時対応がより容易となった。 ・若者の複数回献血者への定着が図られた。 問題点 ・献血情報に触れやすい環境の整備充実 ・携帯電話等による若者への一層の献血意識の普及啓発の推進 ・献血制限等の強化による複数回献血者の定着化に支障が生じている。	○初回献血から複数回献血への移行の推進・強化 ○複数回献血クラブ会員の充実・強化 ○栄養士等による健康相談の充実と講演会等の定期開催
香川県		○携帯メールによる献血依頼や情報発信が可能な若年層を主たるターゲットとし、複数回献血クラブへの登録を推進した。(献血者へ献血依頼はがきに複数回献血クラブへの登録PRを掲載し、献血依頼を行った。)	○学生を中心とした若年層の献血者が、複数回献血クラブへの登録があったが、まだまだPR不足により、登録数が増えていない。	○平成18年度末に、複数回登録者への会員特典(携帯電話着信メロディーダウンロード等)が付加されたが、今後も、このような会員特典を実施することにより、登録へのPR材料としたい。

都道府県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事柄を含む。)	実施結果(効果、問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
愛媛県	【複数回献血者確保について】	○「複数回献血クラブ(愛称:リピートあいビー)」を設置。年2回以上複数回の献血に協力してもらえらる献血者を募集。携帯電話やパソコンから登録、メールで献血の依頼を行う。	○18年度会員登録数は495人 ○緊急時の献血者確保につながっている。 ○登録推進キャンペーンとしてリラクゼーションマッサージ等を実施	○登録者数の増加を図るために、積極的に広報を行う。
高知県		○複数回献血用推進パンフレット、チラシ、推進カードの配布。献血メールクラブの活用 ○協力団体から名簿の提供→ダイレクトコール ○比重不足等不適格者へ栄養相談、健康相談	○クラブ会員は増加しているが、情報発信が直接献血につながっているが疑問  ○献血ルームに相談コーナーを開き、利用いただいた。	○献血者自身の定期的な健康管理にも役立つことをもっとPRしていきたい。
鳥取県	【企業等組織的な献血の確保について】	○企業団体献血の推進強化  ○地方自治体による集団献血の推進	○二次医療圏ごとに献血推進員を配置して企業団体を訪問し協力依頼をおこなった。  ○県・市町村・血液センターで献血推進班を組み企業訪問を行った。	○県・市町村・血液センターとの連携強化が献血推進に効果的であることから、更なる具体的実施事項の充実を図る。
島根県		○県献血推進協議会会長(知事)からの感謝状贈呈	○年々贈呈数が減っており、また、時間内での受入れが困難な企業が増えてきている。	
岡山県		○新設事業所等への配車計画	○大型事業所等への移動献血車の配車に伴い、献血協力年数は長いが献血者数の少ない事業所への配車が減少した。 ・既存献血協力企業の関連企業への呼びかけ ・ロータリークラブの新規配車	○継続的な献血者の確保ができる新規事業所の開拓及び協力年数の長い事業所への献血者数の掘り起こしが必要
広島県		○血液センターと連携して職域団体、学校等における献血推進のための呼びかけ  ○血液製剤の在庫不足が予想される際の職域団体、学校等への献血の協力要請	○血液製剤の在庫量を定期的に各市町へメール配信し、献血への協力依頼 ○血液不足時に県施設において緊急献血実施 ○献血を呼びかける懸垂幕の作成	○集団献血による適正在庫数量の確保及び不足予想時の緊急対応  ○不足予想時の緊急対応
山口県		○新規団体、事業所等への訪問 ※各協力団体(LC・RC・JC等)に対する現状説明会の実施	○新たな献血協力団体の発掘	○献血者の増加及び拡充 ○協力団体とのコミュニケーションは不可欠 ○国の出先機関の時間内の協力が得られない
徳島県		○新規団体、事業所等への訪問活動の強化 ○継続的協力企業等の表彰 ○企業への配車時に周辺企業等への協力要請 ○献血ルーム周辺企業への呼びかけ ○献血協賛企業活動推進事業の推進	効果 ・計画的な血液の確保及び緊急時の協力要請が容易になった。 ・献血に積極的に協力する企業等を社会に認知してもらい、献血活動の普及・拡大が図られる。(ロゴマークの発行 H19. 2~) 問題点 ・特に規模の小さい企業への複数回献血 ・献血推進団体の育成・強化	○厚労大臣表彰状選考要領の見直し(小規模事業所も対象となるように組織的部分を改訂) ○献血協力団体との協働、意見交換推進・強化 ○事前の協力依頼の徹底 ○献血者の減少が予測される時期での組織的協力体制の構築
香川県		○大企業を中心に、可能な範囲で複数回の献血を依頼した。過去に献血実績はあるが、しばらく献血を行っていない事業所の再開拓にも取り組んだ。 ○積極的に献血に協力してくれている企業等を県の献血運動推進大会や血液対策推進協議会等の場で表彰した。	○しばらく献血を行っていなかった事業所の再開拓は行えたが、年間複数回実施については、スムーズに行えなかった。 ○過去に表彰歴のある団体は対象から外すため、大規模企業等の転入が少ない地方では、新規団体の選出が困難である。	○年間複数回献血実施事業所に対しては、何かしらのメリットがないと困難である。  ○献血サポーターのロゴマークの価値を高めるため、マークの認知度を高めるPRが必要であると考え。

都道府県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事柄を含む。)	実施結果(効果、問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
愛媛県	【企業等組織的な献血の確保について】	○既存の協力団体に対し、協力回数を増やしてもらうよう要請 ○新規協力事業所の発掘	○安定的な献血者の確保  ○約60団体の協力団体。(ライオンズクラブ・建設業協会) (問題点)協力団体構成員の高齢化の進行	○協力団体、協力事業所の確保は安定的な血液の確保につながるため、引き続き取り組む。
高知県		○高知市内LC合同献血 ◎商工会青年部、県遊戯業協同組合による県下の取り組み ◎専門学校による1000人献血キャンペーン	○積極的な呼びかけ、献血協力が得られた。 ○新たな献血者が確保できた。  ○H18.6月にスタート。各種専門学校や団体による組織的な協力が必要	○県下を網羅した組織への積極的な働きかけが必要
鳥取県	【上記以外(献血推進キャンペーンの実施等)】	○鳥取大学献血推進サークル「白うさぎ」が血液センターと協力してイベントを実施した。	○自主的活動として「新入生歓迎献血」、「クリスマス献血」等を年5回程度、企画し若者に献血の必要性を訴えながら学内献血を定着させている。	○若年層対策として活用を検討する。
広島県		○7月「愛の血液助け合い運動」 懸垂幕掲示、ポスター配布・掲示、県広報誌、テレビスポットによる広報 広島県献血推進大会開催(7/31) 広島駅、献血ルーム「もみじ」前で献血呼びかけ(7/1) ○1月～2月「はたちの献血キャンペーン」 ポスター配布・掲示、チラシを作成し各市町の成人式で配布、県広報誌による広報 1/8成人の日にアリスガーデン街頭献血 (カーブ選手による献血呼びかけ) ○血液センターなど各関係団体が実施するイベントやキャンペーンについて、県民への広報活動などに積極的に協力	○計画的な年間献血者の確保     ○献血者が減少しやすい冬場から春先にかけて献血者を獲得するため、献血啓発冊子の配布や献血ルームで記念品を配布	○複数回献血者の獲得を図る。
山口県	○7・8月「愛の血液助け合い運動」 13市15会場においてイベント開催  ○クリスマス献血キャンペーン開催(12月8～22日) ◎場所:血液センターにて(FM山口公開録音)	○高校生、大学生、専門学校生など若者の参加多数あり。  ○波及効果の高いマスメディアを通じ、広く県民に訴えるキャンペーン(来場者:約200人)	○若年層への啓発及び献血者の拡大  ○波及効果の高い、マスメディアの活用は、血液不足時の献血者の確保に効果的	
徳島県	○高校生への献血思想の啓発と200ml献血体験	効果 ・学内献血については、保健所、センターと個別訪問するなどして、減少を最小に抑えるように努めたが、数次的効果は認められなかった。 問題点 ・高校生献血については、今後の献血者確保につながる200ml献血体験を推進する県と、患者への安全性や医療機関からの需要増が見られる400ml献血を推奨する血液センターとの間で方向性に大きな差異が生じており、今後の献血を推進する上での大きな課題となっている。	○必要な時に必要な呼びかけができる体制を整備 ○同世代からの献血呼びかけの一層の充実・強化(JRC、学生ボランティア)	

都道府県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事柄を含む。)	実施結果(効果、問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
香川県	【上記以外(献血推進キャンペーンの実施等)】	○血液が不足しがちな夏季・冬季の時期にキャンペーンを実施。それぞれに、若年層を意識した啓発イベントを行った。 また、献血推進団体へ400mL献血・成分献血の必要性を説明した。	○「献血」については広くPRできたが、対象が広く、その必要性を認識してもらえるまでの内容にはできなかった。 また、400ml献血及び成分献血の必要性を十分に説明することにより、安定的な確保につながるものと考える。	○小・中学生を対象とした啓発としては、単にリーフレットのものを配布するだけにとどまらず、学校の授業などでとりあげてもらえるような環境をつくる必要がある。 また、献血推進団体への周知・説明会を実施することにより、安定的な確保が行える。
愛媛県		○「えひめ献血感謝のつどい」の実施。 血液事業の現状についてのパネルディスカッションの実施	○県民に献血を身近に感じてもらうとともに、献血の必要性についての理解を図った。	○一般県民に献血に興味をもってもらえることができる良い機会であるので、継続していきたい。
高知県		○献血推進キャンペーン(夏・冬を中心に5回)  ○血液使用検討会議の開催 血液使用量の多い5病院の院長を対象に開催	○特に「はたちの献血」では知事を先頭に呼びかけを行い、ラジオでのスタジオ・現場の生中継を実施 ○赤血球製剤供給本数(月平均)の変化 会議開催前(4～12月):3,959本/月 会議開催後(1～3月):3,431本/月	○会議を継続する中で、使用量の減少要因を検証するとともに、他の医療機関にも徹底を図る。

## 「献血構造改革」の主な事項に関する取組

ブロック名 九州地区

県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事例を含む)	実施結果(効果・問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
福岡県	【若年者確保について】	○学生献血推進協議会を中心とした啓発活動 ・福岡・北九州にある学生献血推進協議会を中心に各大学等の献血サークル同士の情報交換 ・献血キャンペーン中に若者によるイベント(クイズ、アトラクション、模擬店など)を実施  博多献血夏祭り クリスマス献血 はたちの献血キャンペーン など	特に血液が不足する時期にイベントを行うことにより、血液の安定供給に寄与している。 学生メンバー自らがアイデアを出し合い、活動することによって、若い世代の献血への関心が高まる。大学によっては、サークル部員の確保に苦慮したり、献血活動に取り組む時間がないなど、活動の活性化についての課題がある。	○インターネット等を活用した啓発 平成19年度から県のホームページに献血に関する情報ページを設け、情報提供することとしている。
佐賀県		①学生献血推進委員の研修  ②「はたちの献血キャンペーン」にあわせイベント開催等(ラジオによるライブ放送)  ◎③成人式会場での献血啓発品(ティッシュペーパー)の配布(佐賀市等)	①2回開催。参加者20名、16名。(献血についての基礎知識などについて啓発できた。) ②10～30代を中心に約200名参加。 (ミュージシャンによるライブステージ、献血トーク、クイズを通して献血についての正しい知識等を普及できた。 ③なかなか、受け取ってくれなかった。(成人式という特別な雰囲気の中での啓発方法を検討する必要あり。)	新たな学生献血推進委員を募り、学内献血を推進する。
長崎県		○教育現場における献血の推進 ○大学・専門学校において積極的に献血を実施 ○学生献血推進ボランティアを中心とした献血者確保イベントの実施 ○(平成19年度新規事業)県内中学生及び高校生を対象とした献血普及啓発ポスターの募集	○県高等学校長会、養護教諭理事会における献血普及啓発への協力の要請 ○「愛の血液助け合い運動」期間中、高校を直接訪問し、パンフレットを配布(長崎市) ○学園祭等において積極的に献血車を配車 ○固定施設を中心にサマーイベント(7月)、クリスマスイベント(12月)を実施	○教育長と連名により県内中学・高校へポスター募集を実施予定
熊本県		①学生献血推進協議会の支援 学生リーダーへの研修、学園祭等での献血推進  ②小中高校生対策 献血啓発グッズの配布	①各キャンペーン(学生献血クリスマス、はたちの献血)等において、学生が献血を呼びかけ特に若い世代間の連帯感を育み、将来の献血者確保に繋げたい。  ②献血についての意識付け	日頃から学内等において効果的な啓発活動を展開し献血体験者の増加を図る方策の検討。

県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事例を含む)	実施結果(効果・問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
大分県	【若年者確保について】	①小学校でPTAの献血を実施した。 ②中学生の施設受入れ等を行った。 ③中学卒業予定者に献血マンガ本を配付。 ④高校生の400mL献血を学校へ依頼。 ⑤◎JRCへの献血についての講話 ⑥高校・短大・専門学校等の卒業予定者に啓発物品とリーフレットを配付。 ⑦◎大学の学園祭での献血講話による献血者確保 ⑧青年会議所等への講話	①親の献血をする姿を見ることにより献血の啓発に繋がった。(問題点)母親が比重不足等で献血が出来ないケースが多い。 ②血液センターの概要や献血ルームでのボランティア活動をすることにより献血の重要性を学んでもらった。(問題点)集約化のため検査業務、来年からは製剤業務は無くなるので、福岡(久留米)への施設見学になるのか。 ③卒業予定者一人一人に配布し、献血の必要性・重要性を理解してもらった。 ④ほとんどの学校にお願いに行ったが400mL献血は難しかった。(問題点)養護関係があり積極的ではない。 ⑤JRCの生徒	①PTA献血を増やすことにより多くの小学生の献血の啓発に繋がる。将来の若年献血者の確保。 ③若年層の献血者確保。 ④引き続き学校にお願いに行く。若年層の献血者確保。(養護関係者には国よりのPR等が必要) ⑤若年層の献血者確保。 ⑥若年層の献血者確保。 ⑦事前に移動献血バスの配車と合わせて計画し、若年層献血者を確保する。 ⑧若年層の献血者確保。
宮崎県		若年層を対象としたテレビコマーシャルを7月の「愛の血液助け合い運動」及び1月から2月の「はたちの献血キャンペーン」の期間に放映することによって、献血協力者の拡大を図る。	7月と1、2月に1回15秒のCMを45回、計90回放映したが、視聴が献血に直接結びついたかどうかの効果判断が困難である。	献血協力者にアンケートを実施し、より効果的な啓発手段を検討する。
鹿児島県		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中学3年生を対象とした血液教育事業</li> <li>・ 小学高学年を対象とした献血おもしろセミナー</li> <li>・ 学生献血推進協議会の育成・強化</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 献血可能年齢に達した時の献血への協力が得られる。</li> <li>・ 同世代の者が呼びかけることにより、若年層に対し、効果的な献血思想の啓発が図れる。</li> <li>・ 高校生献血の推進のあり方について。</li> <li>・ 学生献血推進協議会への加盟促進</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 血液教育事業実施報告に基づく評価</li> <li>・ 献血キャラクター「けんけつちゃん」の活用</li> </ul>
沖縄県		高校や専門学校で献血教室を実施。献血制度の説明とあわせて受血者による輸血体験談発表を行った。	献血への理解や関心を高めることができた。卒業献血記念として3年生を対象に実施することで効果をあげている	献血教室は引き続き実施し、実施校を増やしたい。

県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事例を含む)	実施結果(効果・問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
福岡県	【複数回献血者確保について】	①成分献血者の登録 固定施設(献血ルーム)で下記の種類の登録を行い、登録者に対して電話、はがき、メールによる依頼を実施 ・HLA適合血小板登録・RH(-)登録 ・PC-CLUB(血小板登録) ※メールクラブ登録(平成18年3月開始) ②県職員の登録	①特に平成18年3月に開始したメールクラブ(メールによる依頼)を運用することにより再来率が極めて高くなっている。 応諾率 昨年度最高 65.2% (ハガキ 約10%、電話 約20%) ②年3回の県庁献血時に庁内メールにより、協力依頼を行った。	①現在は、血小板を主とした登録を行っているが、例年冬季に赤血球が不足するため、血液型別不足に対しても対応できるよう400ml献血の登録を推進する。 ②県職員だけではなく、他の自治体へ広がるよう、研修会等において依頼することとしている。
佐賀県		◎①県独自のEメール・携帯電話登録制度から複数回献血クラブへの移行 ②しばらく献血していない人を対象に、葉書による献血の呼びかけ(12月に936名、2月に555名、2月末に350名に送付)	①平成19年3月末現在登録者838名。 ②約280名の方に協力いただいた。	献血手帳が献血カードに切り替わったことで、次の献血実施可能日が表示され、複数回献血を多くのかたにしていただければ、複数回献血クラブへの登録者の増加につながる。
長崎県		○献血者登録者制度の推進 ○「400mL・PC献血クラブ」の推進	○毎年、庁内において登録者を募集しており、緊急時に協力を要請 ○「400mL・PC献血クラブ」登録者200名	
熊本県		複数回献血協力を呼びかける「知事からのメッセージ」配布	献血再来者の確保を図るため、献血者に次回献血可能日を知らせて、複数回献血への協力を呼びかける「知事からのメッセージ」を配布。	次回献血日の周知については、献血カードと重複するため、「知事からのメッセージ」作成検討中。
大分県		検査結果異常なしの初回献血者及び献血ルームでのリピーターに登録のお願い文書を出し、年間目標を確保する。	登録者の確保に繋がった。 (問題点)既存の献血者登録制度と競合	血液の安定供給の確保に繋がる。 ポスター、ホームページなどにより登録のお願いをする。 既存の献血者登録制度との一本化を検討する。
宮崎県		宮崎県複数回献血クラブの登録推進。	登録者数がなかなか伸びない。	年に1回の献血協力者に対し、2回目以降の協力をお願いして、クラブへの登録を推進する。



県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事例を含む)	実施結果(効果・問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
鹿児島県	【複数回献血者確保について】	・複数回献血クラブの普及啓発	・クラブ会員数：295名(平成19年3月末) ・会員向け健康相談事業：9回実施、294名。(平成18年度)既存の献血者登録制度の取扱いについて ・既存の制度を存続させるのか、登録されている者の複数回献血クラブへの移行をいかにすすめていくか、クラブと並行するのか、各県の現状と取り組みについて御教示をお願いしたい。	・献血登録者の同クラブへの移行
沖縄県		企業や街頭に献血バスを配車した場合、複数回献血クラブHPアドレスが印刷されたハガキで、前回までの献血者に献血依頼した。	ハガキによる献血応答率は27%であった。しかし、複数回献血クラブへの入会はまだまだ少なく増やす必要がある。	今後も、複数回献血クラブの案内が入ったハガキで献血の依頼を継続していく。
福岡県	【企業等組織的な献血の確保について】	○ライオンズクラブとの合同研修会の実施 県保健所及び市町村献血推進担当とライオンズクラブとの合同研修会を県内4地区で実施(昨年度の献血実績の報告及び今後の献血推進事業についての研修)	血液事業の現状と課題を共有化し、献血への一層の啓発の必要性について共通認識を持つことができた。 また、各ライオンズクラブの献血者確保の取り組みについて議論するなど活発な意見交換ができた。	○行政、企業、各協力団体との連携の推進 行政、企業、各協力団体と連携して情報交換、意見交換の場を設け、血液事業への理解促進、協力体制の強化を図る。
佐賀県		献血協力企業団体への協力依頼。	市町、保健福祉事務所担当が、直接事業所へ協力依頼に出向くことが少なくなってきている。	
長崎県		○新規事業所及び献血協力団体の開拓	○昨年度は事業所48団体を新たに開拓	
熊本県		献血推進リーダーの活用 (リーダー：県から委嘱を受け、献血協力団体等の組織において組織における啓発と献血計画等行政との連絡・調整に当たる)	安全で安定した血液の確保が見込まれるが、献血者の固定化傾向に繋がる恐れがあり、献血未体験者との二極化が懸念されることから、更に効果的な啓発等施策を講じて献血体験者を増やしていく必要がある。	献血未体験者や献血から遠ざかっている人達を掘り起こし、献血会場へ向かわせる方策の検討。
大分県		①年間50人以上の献血者協力企業に対して、献血サポーター登録のお願いにまわっている。 ②ライオンズクラブ、青年会議所等の研修会の実施	①18年度は14企業の協力を得た。 ②献血についての理解を深めた。	献血者底辺の拡大に繋がり、血液の安定確保が図られる。
宮崎県		献血協力企業や団体への献血推進リーダーの設置及び研修会の開催。	企業や団体に、推進リーダーを設置することで、より一層の献血協力を図り、献血者を安定的に確保することができる。	継続研修を実施しながら、新たな協力企業への献血推進リーダーの設置を目指す。

県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事例を含む)	実施結果(効果・問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
鹿児島県	【企業等組織的な献血の確保について】	・ライオンズクラブ献血推進セミナー	・セミナー参加者：107名 ・ライオンズクラブ主催献血：のべ74回(平成18年度)6,296人(15.4%/献血パス) ・献血協賛企業の検討	・ロゴマークの活用
沖縄県		毎年同じ時期に献血を実施。 年1回の献血実施企業には、年2回の協力を依頼。 赤十字奉仕団に献血呼びかけを依頼。	献血実施時期が定着した。 渡航歴等の献血問診強化で、献血不適格者が判明している。	献血実施時期の定着化による、安定的な年間採血計画の作成。
福岡県	【上記以外(献血推進キャンペーンの実施等)】	○愛の血液助け合い運動(7/1~7/31) ○福岡県献血運動推進大会 ○クリスマス献血キャンペーン(12/1~12/25) ○はたちの献血キャンペーン(1/1~2/28)	例年実施しており定着している。	
佐賀県		平日の「市町成分献血の日」事業	献血者179名	
長崎県		○九州ブロック学生献血推進サミットへの参加	○他県の学生ボランティアと情報交換を行うことにより、今後の献血推進活動に役立つ	
大分県		①若年層献血推進キャンペーン ・サマー献血キャンペーン(7月) ・クリスマス献血キャンペーン(12月) ・はたちの献血キャンペーン(1月) ・バレンタイン献血キャンペーン(2月) ・学内献血運動キャンペーン(随時) 学生献血推進協議会のメンバーによる学生街頭献血応援団(献血サポーター)を編成し、献血の呼びかけを行う。 ② 多数回献血功労者や献血功労団体に県知事表彰・感謝状を贈呈した。	①多くの人に献血の意義を理解してもらった。  ②マスコミに情報提供し、多くの県民に周知した。	
宮崎県		毎月、新聞紙上に、献血の情報や成分献血協力実績のあった企業名や団体名の掲載。	献血を社会貢献活動の一つとして位置づけ、協力企業名の掲載によって企業のイメージアップに繋がり、継続的な協力が期待できる。	新たな組織的献血の協力企業の掘り起こしに繋げる。

県名	事項名	取組の概要(取組で重点を置く事例を含む)	実施結果(効果・問題点等)	平成20年度計画作成に当たり参考となる事項
鹿児島県	【上記以外(献血推進キャンペーンの実施等)】	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ハート献血(枕崎青年会議所主催)</li> <li>・「愛の血液助け合い運動」街頭キャンペーン</li> <li>・「愛の血液助け合い運動」についてのラジオ対談(MBCラジオ)</li> <li>・「夏のキャンペーン」(県建設業青年部会)</li> <li>・アロハ献血(指宿市)</li> <li>・献血者功労者表彰式</li> <li>・赤十字ふれあいランド2006</li> <li>・全国学生クリスマス献血キャンペーン2006</li> <li>・初詣献血</li> <li>・「はたちの献血」キャンペーン</li> <li>・第17回鹿児島輸血医療懇話会</li> <li>・バレンタイン献血</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・キャンペーン等を実施することで、広く県民に献血協力を呼びかけ、より多くの献血者を確保できた。</li> <li>・輸血医療懇話会においては、輸血医療のあり方に関する講演や医療現場における事例発表等を通じて、血液製剤の適正使用を図った。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・献血に対するイメージアップ</li> </ul>
沖縄県		<ul style="list-style-type: none"> <li>①愛の血液助け合い運動(7/1~7/31)県市町村と共催で、地城市町村をキャラバンで回り、知事メッセージを市町村長に手渡した。</li> <li>②全国学生クリスマス献血(12/1~12/25)学生ボランティアが中心となって献血会場でバンド演奏やダンスで献血者を呼び込んだ。</li> <li>③はたちの献血(1/1~2/28)二十歳になるミス沖縄等に1日血液センター所長任命。知事メッセージ。街頭キャンペーンを実施した。</li> </ul>	<p>各キャンペーンが定着しており、マスコミによる広報効果がある。</p> <p>キャラバンで知事メッセージを首長へ届けることで市町村の献血への取り組み意識が向上した。若年献血者の確保に繋がる。</p>	<p>今後も継続していく。</p>